

# とさめき



**特集1** 湯浅誠氏講演会「格差と貧困をなくすために!?!」

**特集2** 高齢化社会〈高齢者の就労〉〈東久留米市で働く方々〉

2011 春

NO.

46

## Contents

2. トップインタビュー 好きだから続けられた! ~ショーケースのないケーキ屋さん~
4. 特集1 湯浅誠氏講演会 格差と貧困をなくすために!?
7. 特集2 高齢化社会 〈高齢者の就労〉〈東久留米市で働く方々〉
10. 情報ホットライン 書籍紹介 / 講座レポート
12. フィフティ<sup>2</sup> から 東久留米総合高校でデートDVの寸劇 / 『フィフティな川柳』入賞表彰式



## 好きだから続けられた！

「シヨールケーキの無いケーキ屋さん」

むらやま まりこ

村山真理子さん 「ケーキドマリコ」オーナー

「ケーキを作って届ける」というスタイルから始まった予約制の手作りケーキ店。5人の子育て、母親の介護と、「家庭」を大事にしながら、滝山団地の三室で、「ケーキ店」に加え、「喫茶室」（予約制）も始めた村山さん。「家庭」と併走しながらお店は21年目を迎えました。

「ケーキ店を始めたきっかけと『マ  
リコスタイル』」

私は「料理が好き！」「ケーキを作るのが好きで、ご馳走するのが好き！」でした。

子どもが5人いますが、最後の子どもが幼稚園に入ると自分一人での時間ができ、なにか仕事をしたかと思いましたが、「子どもと家庭を大事にしたいので、「家でできる仕事」はないものかと考えていました。

そんな時、友人から「ケーキを作ってください」と頼まれたことが「ケーキ作り」が「仕事」となったきっかけでした。

「仕事」としての準備もなしに始

まったケーキ店は、注文を受けてからケーキを作り、お客様の玄関まで配達し、タッパーのケーキホルダーからお皿に移して完了というものでした。

だんだん注文が多くなってきたので、ケーキ箱を買うことにしましたが、100個買った箱があったという間になくなりました。

そのうちにお客様から「バスに乗って友達にケーキを持って行きたい」という声が上がりました。ケーキの持ち運びのために箱にリボンをかけようということになり、「白い箱に赤いリボン」になりました。さらに包装紙も用意しようと思いましたが、購入が「1万枚単位」と聞いて怖くてやめました。

そして考え出したのが「ペーパーナプキン」の利用です。ナプキンなら、お客様も再利用できますし、もし仕事がうまくいかなかったら家庭で使えます。今では何種類か用意してお客様に選んでいただいています。こうして、「箱にペーパーナプキンにリボン」の『マリコスタイル』ができました。

「お店のシールがあったらプロっぽいわよ」との声にシールも製作、本格的にケーキ屋さんらしくなってきました。

「さらなるお店の進化

「ホールケーキは食べきれないの  
で切って売ってよ」という声をき

っかけに「カットケーキ」の販売を始めました。お店を始めて1年半くらいの頃だったと思います。

実は、カットケーキは残ってしまふと大変なので、それまでは注文はホールで受けていました。カットケーキ販売を始めて失敗もありましたが、お店の名前が大きく広まることになりました。

その後、仕事をしている友人から「ケーキを食べる場所を作ってほしい」との要望がありました。仕事と家庭を切り替える場所がほしいと言うのです。当時、私自身は寝たきりの母を我が家に引き取って介護をしていました。

私は「大変なときだからこそやってみよう」と決めました。けれ

ど場所が問題です。他に借りると家賃が相当かかるし、自宅を離れると家のことができなくなりますが、結局、金銭的な無理をしないこと、そして、子どもと家庭を大事にしたいという気持ちから自宅を改装して、予約制の喫茶室を始めました。始めてから大変なことをしちやったなとも思いましたが、なんとか喫茶室も軌道に乗ってきました。そうしたら今度は、「ランチをやつてよ」という要望があり、今では予約制でランチもやっています。

### — 母親の介護 —

母はだんだんと色々なことができなくなり、毎朝40分は母のための時間になりました。もちろん朝だけでなく、日に何度も手助けが必要になりますし、お医者さんやヘルパーさんの訪問もあります。仕事をしながらの介護で大変でしたが、子どもたちも手伝ってくれました。母の部屋のふすまを開けると不思議とケーキ作りの気持ちに切り替わりました。1年5カ月の介護を経て母は亡くなりました。

と実感しました。その40分は、倒れた当初から母の介護を続けてきた中で、母の状態に合わせて少しずつ積み重ねて捻出した時間だったんですね。そうやって、ずっと続けていた介護だったからこそ最後までできたんだと思いました。

### — 子育て —

ケーキ作りの仕事を始めてからの毎日は、家事や子育てはどんなふうをやっていたのか、時間をどう使っていたのか、覚えていないのです。ある時、「この頃ケーキの仕込みが早くなったな、上手くなったのかな」と思ったときがありました。

けれど、それは腕が上がったのではなく、いつのまにか子どもたちが成長し、お弁当の数が減り、洗濯物が減り：とその分、ケーキ作りに費やす時間ができていたんだと気がつきました。

現在、5人の子どもたちは皆、独立して、2人が結婚し、8人の

孫がいます。それぞれが「自分の好きなこと、好きな人」を見つけて巣立ってくれたらいいなと思っています。

お店のホームページや毎月発行しているチラシの挿し絵などは子どもたちやそのパートナーが手伝ってくれています。

### — 夫はイクメンの先駆け?! —

大学時代に知り合った夫はおとなしくて、やさしくて、無口な人です。「結婚して5人の子どもがほしい」「料理が好きだから将来、料理でなにかしたい」という私の望みを聞き入れてくれました。

夫は子どもをお風呂に入れたり、休みの日は子どもと出かけたりと、協力してくれ、私の話もよく聞いてくれました。子育てはやっぱり2人で頑張らないと、と思います。夫の趣味は家庭菜園です。無農薬で作る野菜は家庭の食卓に、そしてケーキや喫茶室の料理の材料になっています。

### — 病気とこれからのこと —

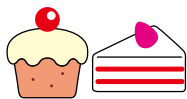
5年前の9月、体調を崩しました。リウマチでした。歩くこともつらい時期もありました。もともと料理が好きなので体調が悪い時も食事は自分で作りましたし、ケーキ作りもできる範囲で続けていきましたが、お休みの告知もできぬまま休業に近い状態でした。治療に専念する中、少しずつ快方に向

かっていきました。仕事の再開を皆さんがとても喜んでくださったことで、自分の仕事の意味を初めて実感しました。

このあいだ、イタリアに行ってきましたが、創業が1952年、80歳ぐらいのご婦人が58年間やっているパン屋さんがありました。私も続けられるところまで、やってみよう!と思いました。

これからは卵や生クリームなど、材料にこだわり、おいしいケーキ作りに力を注いでいきたいです。「やめどき」はきっと、家族や友人が助言してくれると思います!

背伸びをせずに、その時々々のタイミングで、友人やお客様の声を生かしながらお店を続けてきた村山さん。柔軟な発想で、可能性が広がってくとまた新たな形を展開されていく。村山さんの夢の実現の秘訣はそこにあるのだろうと、お話を聞いて感じました。



ケーキドマリコ HPアドレス  
<http://members.jcom.home.ne.jp/cakedemariko/>

東久留米市男女平等推進センター フィフティ<sup>2</sup> &働き方について考える会「シッカリ」共催  
 私たちのこれから“くらしむきと働き方” Part6

湯浅誠氏 講演会

# 格差と貧困

をなくすために!?

- 日時 平成22年10月10日(日) 午後2時～4時
- 場所 東久留米市役所 市民プラザホール

内閣府参与、また「年越し派遣村」村長として知られている湯浅誠氏が、今の日本の「格差と貧困」について、またそこからの脱出についてお話をされました。

今回はその講演のダイジェストを「特集」としてご紹介します。



プロフィール

ゆあさ まこと  
**湯浅 誠氏**

NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長、反貧困ネットワーク事務局長。90年代よりホームレス支援に携わる。内閣府参与(緊急雇用対策本部貧困・困窮者支援チーム事務局長)

## 貧困の広まり

貧困の問題とはどのような問題なのか考えていきたいと思えます。

貧困とはどういう状況をいうのかと考えたとき、日本人のイメージする貧困は「住むところもなく、食べるものもない飢餓に近い状態」のような気がします。

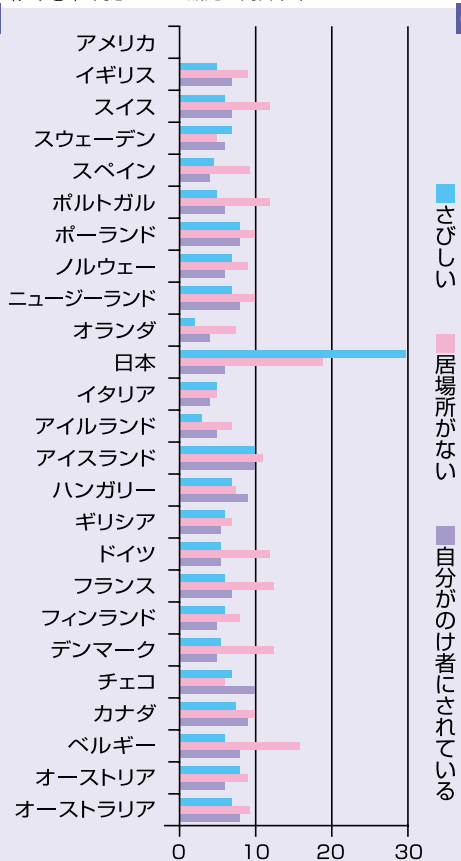
だから貧困が日本に広がっていることに実感がありません。しかし、実際は2009年10月20日に政府が発表した日本の相対的貧困率は15.7%、人数にすると約2000万人の人数が貧困状態にあるといわれています。

相対的貧困とは、所得が国民の中央値の半分以下の所得で生活する人のことで、具体的に言うとは

2007年の厚労省の調査では、3人世帯で月収20万円以下の人数が相対的貧困状態とカウントされているんですね。確実に貧困は広がっているように思えます。

それはなぜか？そして今後どうしたらよいか考えてみたいと思います。2007年のユニセフ(国連児童基金)の調査(図①)では、先進国の15歳の子どもに「さびしい」「居場所がない」「自分がのけ者にされている」と感じているかについて聞いています。調査結果をみると、「そう感じる」と答えた子どもは日本がダントツです。日本は「さびしい」と感じている子どもが29.8%、「居場所がない」が18%でした。「さびしい」と答えた子どもは海外では

自分の福祉について明確な否定的説明に同意する15歳児の割合(%)



資料：UNICEF  
 イノチェンティ研究所「Report Card7」研究報告書(2007年)  
 先進国における子どもの幸せ 生活と福祉の統合的評価より作成

6〜7%なので、比較するととても多いことが分かりますね。

日本の子どもの貧困率（経済的な側面のみた貧困率）は、14.2%なので、「さびしい」と答えた子どもには、経済的に貧困状態ではない子どもが相当含まれています。経済的貧困だけでなく、心の貧困も深刻な問題になってきています。

原因について考えてみると、少子化、父親の長時間労働、競争社会の弊害などいくつかあげられます。

しかし、この調査対象国は、すべて日本と同じグローバル競争にさらされている資本主義社会の国なんですけど、少なくとも子どもたちをこういう気持ちに追い込んでいない。ここには日本の独特な問題が絡んでいるのではないかと思います。

私は貧困、格差は個人の問題ではなく、社会のあり方、国の形の問題であり、長時間労働という雇用問題・教育問題・家族、地域のあり方など、現在の諸々の問題の影響が出ているものだと思います。何か問題がある時にその人個人の問題にして、「自己責任」で解決するよう望まれることが多くなってきました。しかし実際は、「自己責任論」ではどうすることも

できない人たちが増えてきています。

日本では低所得化がどんどん進み、年収300万円未満という世帯がこの10年間で400万世帯くらい増えました。このように低所得化が広がってくると皆余裕がなくなってきましたね。

「自己責任論」は、余裕がなくなり追いつめられた状況の時に使われるんですね。貧困の問題はこのような社会のあり方に関係していると思います。

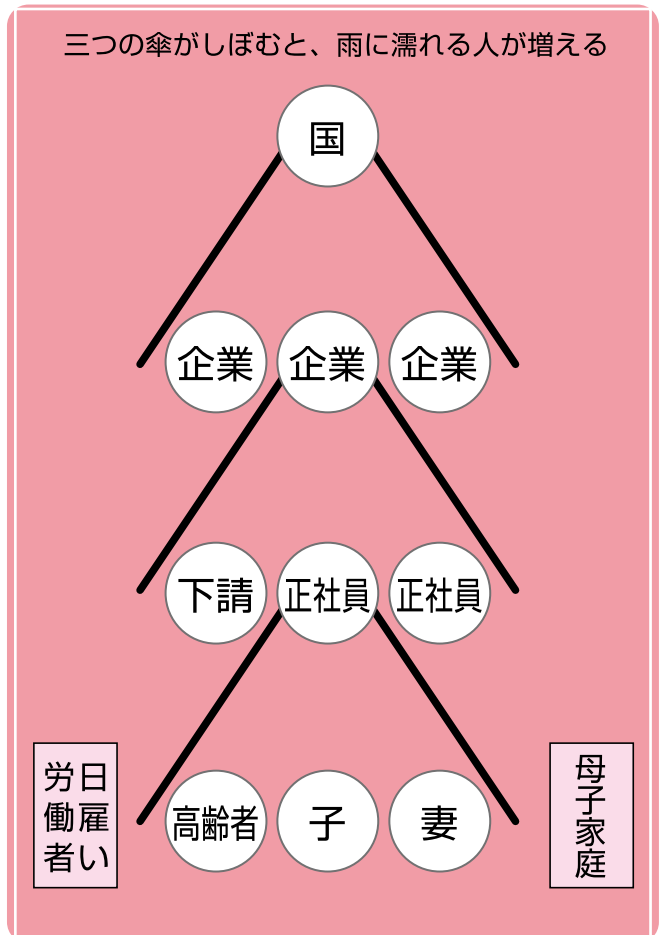
### 閉じてしまった三つの傘

私のイメージする日本は基本的に三つの傘があります。（図②）三つの傘とは、一つ目は国の傘、二つ目は企業の傘、三つ目に家族の傘です。

一つ目は国の傘です。80年代まで国は欧米に追いつき追い抜くために産業育成支援と公的事業投資に力を入れてきました。そして輸出関係の製造業や公共事業を担う建設関係の大企業を支援することで、そういった企業の下請けなどの系列会社やそこで働く正社員を守ってきました。

二つ目は企業の傘。企業は正社員に「生活給」を払っていました。生活給は一家全員分の給料のこと。つまり一人の人間が家族全員を養うた

三つの傘がしぼむと、雨に濡れる人が増える



講演会資料より

めに1.5人か2人分の給料を払っていました。手厚い福利厚生もあり、生活は保障されますが、長時間労働や単身赴任を断れない関係が企業と正社員の関係でもありますね。

三つ目は正社員（家族）の傘です。正社員は多くの場合男性社員であり、家族の傘をつくり、その傘のなかで妻と子どもが守られてきました。そのため、生活を支えるわけではない妻のパートタイム、子どものアルバイトなど非正規労働は賃金が低くても構わないと思われてきました。

90年代以降はこれが大きく変わり、今まで企業を支援し、守ってきた国

の傘が閉じていきます。企業も国際競争が厳しくなり、正社員でなく非正規社員の割合が増え、会社の待遇は悪くなってきました。給与は減り、企業の傘はしぼんできます。すると男性正社員も低所得化で不安定になり、家族の傘もしぼみます。

その結果、生活を支えるための労働ではないからお小遣い程度の賃金でいいと思われてきた非正規労働だけども、それでフルタイム働いて暮らさなくてはいけない人が出てきました。

このように三つ（国、企業、家族）の傘がしぼむことによって雨に濡れる人が増えています。つまりこれが貧困

の広まりなのです。

傘の外の世界は多様化していて、かつて母子家庭や日雇い労働者だけの問題だからと「自己責任論」で済ませていたことが、どんどん広がっている。社会がこのことに気づき、直視するようになったときには、傘は相当しぼんだ後でした。

### \*ワーク・ライフ・ウェルフェア・バランス

もう一つ考えていかなければならぬことは、日本全体の世帯構成や人口構成が変わってきていることです。日本の長期的人口推移のグラフを見ると、人口のピークは2006年でそれ以降は減少し続けています。これから人口減少と高齢化が進むと、生産年齢人口が急速に減っていきます。同時に世帯構成も変化していて、単身世帯が増加しています。単身世帯が一般化していく社会になれば、収入や税制も基本的には個人単位でみていく社会にしていく必要があるでしょう。

また、三つの傘が閉じ、雨に濡れる人が増え、人口減少などの問題を抱えながら、誰が傘をさすのかということが課題になってきます。日本は家族福祉や企業福祉の国ですが、家族も企業も傘が閉じているのが現状です。

家庭福祉に頼りすぎることや家族が問題を抱え込みすぎて不幸な事件に発展することもなくはありません。家族の力には限界があります。

私は傘をさすのは社会だと思っています。一つは市民の支え合い。必要なものを自発的に支えながらつくっていく。障害者の作業所や共同保育所などを必要に応じて市民の手でつくってきたことが例に挙げられます。社会には自助・共助・公助があり、市民の支え合いが共助に当たります。そして「所得再分配」は公助です。社会の共助と公助がどういう方向を目指して取り組まれていくとよいかを考えることは重要です。

私は、「ワーク・ライフ・ウェルフェア・バランス」で全員参加型社会の実現を目指すことを提案したいですね。これからは「仕事と家庭と福祉のバランス」の三つを組み替えていかなければならないと思います。



高齢化社会が進み、生産人口が急速に減っていく中で、女性が力を発揮できる社会を実現することは、実は大切なことだと思います。女性が働き続けることができるためには家庭や育児を社会的に整備しなければなりません。福祉の部分を大きくすることによって家庭に縛られている女性が仕事に出られるようになり、「ワーク・ライフ・ウェルフェア・バランス」が変わるということになります。

社会参加ができ、女性にとってバリアが少ないように変えていくことは、女性のためだけでなく社会のために必要なことだと思います。私は3割できる人間を7割できないからといって切り捨てる社会であってはいけない、3割の能力を生かすことができる社会でなくてはならないと思います。

障害者、高齢者、失業者、生活保護受給者もそれぞれの居場所があり、社会参加できる条件を整えて、バリアが少ない社会にしていく。そして雨に濡れた人たちにも公助と共助で傘をつくって差別の少ない男女共同参画もかなう社会をつくるのが私たちの目指す形ではないかと思っています。

これは時間がかかり、難しいことだ

と思いますが、このような方向性を多くの人たちと共有しながらすすめていくと、日本ももう少し生きやすい社会になると私は信じています。



\*ワーク・ライフ・ウェルフェア・バランス  
ワーク・ライフ・バランスとは「仕事と生活(家庭)の調和」の意味で、性別・年齢を問わず、誰もが働きながら私生活も充実させられるように働きやすい仕組みをつくることです。湯浅氏はこれにウェルフェア(福祉)を加えた「ワーク・ライフ・ウェルフェア・バランス」を提案しています。

### 湯浅誠氏の著書紹介



『どんとこい、貧困!』

理論社  
「自己責任」よ、これでさらばだ!  
ごまかさずにあきらめずに、もう一度希望をつくりだそう! 湯浅氏が静かな情熱をもって子どもたちに書き下ろす。



『貧困襲来』

山吹書店  
「貧困」は自己責任じゃない! 「貧困」は政治的に、社会的に、解決されるのを待っている。

男女平等推進センターで貸し出しをしています。  
ご利用下さい。

# 高齢化社会 高齢者の就労

日本全体の世帯構成や人口構成が変わってきています。少子高齢化が進み、労働力の中核をなす15歳以上65歳未満の人口層、いわゆる生産年齢人口が急速に減っています。今後10年間に生産年齢人口は800万人減ると言われている中で、65歳以上の高齢者も「働き手」として求められています。



(表①) 東久留米市の将来人口(趨勢型、平成12-17年国勢調査ベース)

	基準人口	推計人口			
	平成17年	平成22年	平成27年	平成32年	
総計	115,330	116,749	117,095	115,895	
年齢階層別人口	0~14歳	15,482	14,862	13,692	12,453
	15~64歳	77,227	73,277	69,167	66,663
	65歳以上	22,621	28,610	34,236	36,869
	(75歳~)	8,150	12,169	16,554	20,668
年齢構成比	0~14歳	13.4%	12.7%	11.7%	10.7%
	15~64歳	67.0%	62.8%	59.1%	57.5%
	65歳以上	19.6%	24.5%	29.2%	31.8%
	(75歳~)	7.1%	10.4%	14.1%	17.8%

資料：第4次長期総合計画 基礎調査報告書 別冊(平成21年3月)より作成

総務省による日本の総人口推移のグラフによると、平成18年を境に、それまで増加し続けていた人口が減少し始めています。それと同時に問題になるのが高齢化です。平成22年8月1日現在で総人口に占める65歳以上の割合は23%となっており(総務省・人口推計)、超高齢化社会へと移行しています。東久留米市の推計では、平成27年には65歳以上の占める割合が29.2%と、市民の3人に1人が高齢者になると予測されています。(表①)

## 高齢化社会へ

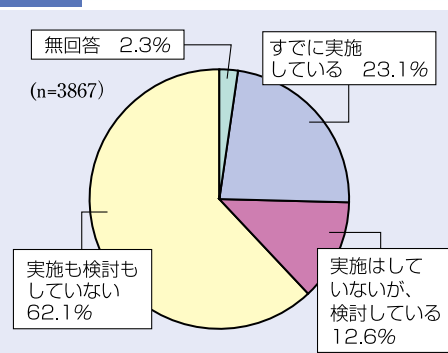
## 雇用の側から

就業希望理由をみると、年齢が上がるにつれ、「失業している」というよりも「健康を維持したい」「知

## 就業希望者

また、これらの企業では「65歳より先の雇用確保措置が必要」な理由として、「会社にとって戦力となる高齢者を積極的に活用する必要があるから」「高齢者でも十分に働くことができるから」などをあげており、高齢者の労働力を戦力と考えていることがわかります。

(図①) 65歳より先の雇用確保措置の実施・検討状況



資料：(独)労働政策研究・研修機構 「高齢者の雇用・採用に関する調査」結果(平成22年)より作成

雇用する側でも65歳以上の高齢者の雇用確保措置について、すでに実施、または検討しているという企業が3割を超えています。(図①)

(表②) 高齢就業希望者の就業希望理由別割合 (%)

		失業している	収入を得る必要が生じた	知識や技能を生かしたい	社会に出たい	時間に余裕ができた	健康を維持したい	学校を卒業した	その他
		男	総数(55歳以上)	18.5	15.7	12.4	5.4	9.2	23.5
	55~59歳	52.5	13.3	7.2	4.7	2.4	5.9	0.0	13.8
	60~64歳	21.1	16.8	12.4	5.7	10.9	18.6	0.0	14.4
	65歳以上	7.7	15.9	13.8	5.4	10.4	30.6	0.1	16.1
女	総数(55歳以上)	7.4	22.8	8.2	7.9	14.5	21.2	0.1	18.0
	55~59歳	12.2	25.1	8.8	10.0	17.8	11.0	0.0	15.3
	60~64歳	8.2	22.3	7.9	8.7	15.3	19.8	0.0	17.8
	65歳以上	3.0	21.2	8.0	5.6	11.2	30.5	0.1	20.4

資料：平成22年版 高齢社会白書より作成 (注)就業希望者とは、無業者のうち「何か収入になる仕事をしたいと思っている者」を指す。

識や技能を生かしたい」という回答の割合が増加しています。65歳以上は男女ともに「健康を推進したい」が3割を占め、一番の理由となっています。(表②)

# 東久留米市で働く方々

それでは、東久留米市で実際に就労している高齢者の方々の現状はどうなのでしょう。市内で働く方や東久留米市シルバー人材センターに登録して働く方に、現在の働き方やお仕事についてお話を伺いました。

◆リタイア後、再度働く気になられた理由、またはその動機などについてお聞かせください。

●仕事への思いや、悩みなどについてお聞かせください。

## 女性 60代前半 アロマテラピスト&インストラクター

### インタビュー ①

◆50代になってから体調不良に悩まされました。仕事もしていたし、家族の問題もあって心身共に病んでいて何とか楽になりたいと思っていたときに、ハーブ園を訪ねたらとても心地よかったです。仕事を辞め自分を見つめなおす時間を持ったのち、アロマの勉強を始めました。自分の収入を持たない不自由さも感じていたのですが、勉強を取って働くことにしたのですが、勉強は難しかったし試験場では最年長でした。

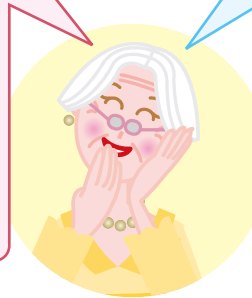


●現在、ボランティアをしているホスピスケア施設はアロマルームもあり、スピリチュアルケアに力を入れていることに賛同して選びました。高齢者にアロママッサージをしていると自分も周りの方も香りに癒されるので、とても楽しいです。  
今後は老人施設などの福祉の場でアロマテラピーを取り入れることを働きかけ、自分も仕事としてやっていきたいです。

## 女性 70代前半 自然食品の店の従業員

### インタビュー ②

◆子どもたちが小学生の頃から、いつも周りの人からお声がかかり、地域でいろいろなお仕事をしてきました。おかげで子どもたちに十分な教育を受けさせることができました。  
70歳で仕事を辞めなくてはならなかった時に、いつも買い物をする店のオーナーから店番にと誘われました。



●週に5日、一日5時間働いていますが、生活にリズムができて健康にいいし、一人暮らしなので、店で人と話す機会があるのも楽しいです。働くことができる間ははずっと続けたいです。収入は、生活費の補助と身体にいい食品を買うことに使っています。離れて暮らす子どもたちに心配をかけないためにも大切なのは健康だから。

●子どもの相手もしたし、庭仕事などもします。グループホームで話し相手もしていますが、その人の人生が語られるのを聴くのは楽しいです。ボランティアにも目覚め、講習を受けて市内の施設でボランティアも始めました。時間のあるときは山登りやオカリナ演奏をしたり、充実しています。幸い健康には恵まれているのでなるべく働きたいと思っています。

## 男性 60代後半 NPO法人のヘルパー

### インタビュー ③

◆15歳から働き始め、いろいろな仕事に就いたのち定年まで総合建築の会社で働きました。  
定年後自分史を書いているうちに、今まで多くの人にお世話になったことに気づき、恩返しをしたいと思いました。近所に老人介護、子育て支援のNPO法人の事務所ができて、ちょっとした手伝いをしていううちに、ヘルパーにならなかと誘われました。



市では、市民一人ひとりが病気や寝たきりにならないよう、日頃から健康づくりを実践し、健康で明るく活気に満ちた地域を目指して、市民・地域・行政が協働で健康づくりに取り組む指針である健康増進計画、「わくわく健康プラン東くるめ（平成18年度～27年度）」を策定し、健康づくりの推進に取り組んでいます。

## シルバー人材センター に登録をして働く方々

◆リタイア後、再度働く気になられた理由、またはその動機などについてお聞かせください。

### 足立さん 70代前半

現在も本業は絵描きです。絵描きというのは、肩こりとか腰痛に悩む人が多いんですね。これは運動不足が原因ではないかと思う、体を動かすような仕事でもしようと思いついたのがきっかけです。

### 中山さん 70代前半

現役の頃は、教員でした。退職後5年間ぐらい、気ままな生活をしていましたが、それも飽き、高齢者でもできる仕事で、できれば今までと同様の仕事があればと、事務局に申



左から中山さん、小林さん、足立さん

し上げたわけでした。

学習教室は、事務局側も需要があるとの考えだったようで、数日後に私と数人の方々に連絡があり、教科や月謝などについて、数回協議を重ねました。

### 小林さん 60代半ば

私は中学を卒業し、すぐ写真屋の仕事に就きましたが、いろいろあつて辞めた後、5年間神戸の植木屋で働きました。その後東京に戻って物流の仕事に就き、定年の60歳まで26年勤めました。定年後、家でブラブラしていてもしょうがない、働けるうちは働こうと。働くことは健康にもいいですね。それでシルバーに登録しました。

●仕事への思いや、悩みなどについてお聞かせください。

### 足立さん

希望した班はハンディサービスといつて、外仕事が主で、どんな仕事でも手がける便利屋的な部署です。

働いて半年も経った頃には、肩こりも腰痛も快癒し、今も続けています。

私の班には今30人くらいいますが、リーダーとしての悩みは、皆高齢者ですので会合に集まる会員が半分

ぐらい。都合の悪い方もおり、仕事をやりくりするのが大変です。人間関係も難しいところがありますね。

あと、仕事の性質上、多忙な時と暇な時とムラがある事ですね。

ハンディ班は何でもやるので、器用じゃないと続かないし、体力も必要です。仕事に気力を持って取り組む人や、物事に何でも興味を持つてやることが好きな人に向いていますね。

### 中山さん

現在は30人前後の子どもが通っています。私の担当している子どもは9人おりますが、教えている子が皆同じ学年ではないし、学校も違う。

また、同学年の子でも学力や能力が異なるし、教える方法も違う。基本的に分からないところを、分かるまで教えるのが、私のモットーなんですけど、子どものメンツを保ちながら、プライドを損なわないように、教えるのが難しいところですね。

でも、私のような年寄りでも頼ってくれる子がいるので、役に立っているんだなあ、しつかり頑張つて教えないとはと、今では生き甲斐を感じています。

### 小林さん

仕事はフリーということで、事務局

からの連絡があれば犬の散歩とか、植木の剪定など、いろいろやっています。

植木屋で働いていた経験が、今とても生かされていると実感しています。あと、動物が好きなので、犬の散歩もとても楽しくやっています。

私の仕事ぶりを気に入ってくれて、次もまたお願いします、と指名をしてくれる方もいます。仕事先から喜んでいただけるので、自然と熱が入りますし、それなりの仕事をしなければ、と思つていきます。

### シルバー人材センターから

シルバー人材センターの会員は、フリーでやっている方、またスポット的にやる方、継続就業されている方などさまざまです。ご依頼には、即、対応できるように考えています。

### シルバー人材センターとは…

働くことを通じて高齢者の生きがいと健康づくりをすすめ、活力ある地域社会づくりをめざし、高い技能や豊かな経験・知識を持った高齢者が、日常生活に密着した臨時的・短期的な仕事を引受けています。東久留米市在住のおおむね60歳以上の健康な方が登録できます。

社団法人 東久留米市シルバー人材センター  
〒203-0043 東久留米市下里4-1-44  
TEL.042-475-0738 FAX.042-473-7730

## 『しがみつかない生き方』

香山リカ著 幻冬舎／777円(税込)

平凡で穏やかに暮らせる  
「ふつうの幸せ」こそが最大の幸福



ごくごくあたりまえの幸せがほしいだけ。”ふつうの幸せ”ふつうの生活”を手に入れるためにはどうしたらよいのだろうか?という問いに対して、著者は10の「しがみつかない」ルールを挙げています。

例えば、「すぐに白黒つけない」こと。各々が決める直感は大切だけれど、私たちが考えることは、白か黒かはつきりしないことが多々あります。慌てず、様子を見て、自分と違う”生き方”、”考え方”を否定せず、”あいまいさ”を受け入れるゆとりを持ちましよう。

例えば、「老・病・死で落ち込まない」こと。生命を受ければ「老」「死」は遅かれ早かれ誰でも通らなくてはならない道です。「迷惑をかけてはいけない」と考えず、死ぬ

まで「元気で楽しく」生きましよう。

例えば、「すぐに水に流さない」こと。水に流してすべからず出直しなどと言われているけれど、流していいことと、流してはいけないことがあります。それをきちんと見極め、明るい”あした”に目を向けて生きていきましよう。

例えば、「仕事に夢を求めない」こと。生きていくためには、仕事をしなくてはなりません。自分に向かない仕事だと言う人もいますが、それを不幸と思う必要はないの

## 『「働きたくない」というあなたへ』

山田ズーニー著 河出書房新社／1,365円(税込)

「自分に合った答え」を探す



お金があつたら働かなくていいと思う人もいれば、いや、人は働くのが当たり前前だと考える人もいます。著者は、人はなぜ、何のために働くのかを若い人たちに考えてもらいたいと言います。この本はインターネットの

サイト上での、著者と読者との対話を載せています。就職活動中の人からのメールや、現役の人からのメール、海外からのメールもあります。これを読むと、みんなが真剣に働くことについて考えているのが分かり、感動すると同時に「何のために働くのか」について、とても悩んでもいいことも分かります。誠実に問いかける大人に、真剣に応える若者。素晴らしいやりとりです。著者は、「まっとうな答えでなくていいんだよ、自分

合った答えを見つけてほしい」と応援しています。自分の答えが見つかった人は、どんなに厳しい中でも仕事に對してもっと心をこめて、そして楽しんで働けそうです。仕事をすることは、社会とつながることであり、人は一人では生きられないのです。分かりやすい言葉で、人には誰でも”行く場所”と”帰る場所”が必要なのだと説かれると、本当にそうだなあと思っています。行く場所とは仕事の場であり、帰る場所とは自分の家のことで、両方あつてこ

その人間の生活なのです。リタイアした人たちにも、この本を読んでもらい、この困難な時代に働いている人、働こうとしている人たちを応援してほしいと思います。



です。「生きる」ために働き続けることにも意味があるのです。「ふつうにがんばって、しがみつかずにこだわらずに自分のペースで生きていけば、誰でもそれなりに幸せを感じながら人生を送れる。それで十分、というよりそれ以外の何が必要であろうか」と、著者が最後に言うように、自分のペースで生きていくためのヒントが書かれています。

## ファイフティ<sup>2</sup> 主催講座

市民企画講座

徳川時代は女性にとつて

暗黒時代だったか？

上州の縁切寺・満徳寺に

学ぶ人間模様

○日時 平成22年10月2日(土)

午後2時～4時

○場所 男女平等推進センター会議室

○講師 高木侃氏

(専修大学法学部教授・  
縁切寺満徳寺資料館館長)

○企画・運営 ☆ボラリスの会



高木侃氏

上州の満徳寺は、鎌倉の東慶寺と並び、「世界に二つしかない縁切寺」の一つです。縁切寺は、不法な夫から妻を救済するという特権が認められた「妻からの離婚請求の場」であり、アジール(避難所)でした。「駆け込み寺」とも言われ、夫の不法に泣く女性を救済し、離婚を達成できたことから「差別撤廃」の

原点ともいえます。

江戸時代は、男女差別が厳しく、どのような理由があっても夫が離婚を申し出ない限り、妻には離婚する権利がありませんでした。高木氏は、そんな時代における満徳寺の歴史や離婚の実状、離婚する際の作法など、当時の実際の資料を交えてお話されました。

離婚一つとっても、婚姻時にあらかじめ妻が夫に請求しておいたり、夫が離婚状を渡した妻から領収書をもらったりと、さまざまです。しかし実際には、示談による離婚がほとんどだったといえます。建前として男尊女卑が徹底していたなかでも、三下り半の背景からは、女性のたくましさも垣間見えました。普段目にするこのない離婚状を実際に手に取り、江戸の人間

～あなたの意志を伝える～

### パープルリボン リボンレイストラップづくり

○日時 平成22年11月13日(土)

午後1時半～3時半

○場所 男女平等推進センター 会議室

○講師 北園美紀氏

毎年11月12日から25日は「女性に対する暴力防止運動」期間です。それに合わせ、暴力防止運動のシンボルであるパープルリボンを使って携帯ストラップを作る講座が開催されました。2時間の講座で、参加者のほとんどが2種類のストラップを完成させました。

パープルリボンは一人でも多くの方が身につけることで、暴力防止の意志が伝えられ、暴力被害にあっている人たちに勇気を与えられます。今回のストラップづくり



を通過してパポ広思とリボン運動が通ります。



吉武輝子氏

模様には思いを込め、参加者からの熱心な質疑応答も含め、あっという間に時間が過ぎた講座となりました。

輝子ふたたび

自分のこと、社会のこと、  
負けずに生きていくわよ

○日時 平成22年10月23日(土)

午後1時～3時

○場所 市役所 701会議室

○講師 吉武輝子氏(評論家)

タイトルにあるように、今回は吉武輝子さんがファイフティ<sup>2</sup>で行う二度目の講演会です。一度目は平成21年3月、山田邦子さんとお2人での講演会でした。実は吉武さんの二度目の講演会は平成22年の2月に開催が予定されていましたが、急病によって開催直前に講演が中止になっていました。

その後、病気を克服され、今回の講演を開催する運びとなりました。自らを「病気のデパート」とおっしゃる吉武さんが、今までの生き方に加え、病気を抱えていても元気に生きる秘訣を力強くお話されました。

「入院中もおしゃれな心を忘れず、食事と睡眠はきちんととり、病気はしても、病人にはならない」「歳をとったら、『金持ち』ではなく、誰かの役に立ち『人持ち』になろう」などの言葉が心に残りました。

特注のおしゃれなカバーをつけた酸素ボンベを傍らに持ち、2時間ずっと立ったままで話し続けられた元氣なお姿と、説得力あるお話に、参加者からは「元氣をもらった」「今後の人生に生かしていきたい」という声が多く聞かれました。



# 「メディアの恋人像に影響されず、相手の気持ちを尊重して」 フィフティ<sup>2</sup> から

## ～東久留米総合高校で大学生がデートDVの寸劇でメッセージ～



DVほっとプロジェクトのメンバー。右端が兵藤氏

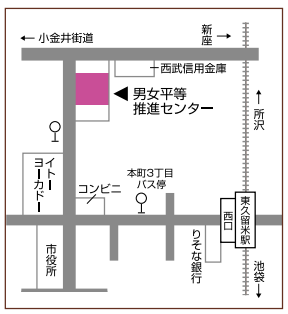
「恋愛経験はまだないけれど、寸劇でも分かりやすかった。」情報をつのみにすると、デートDVが起こりやすいと改めて感じた。「自分が思っていたDVとは違った。相手のイヤなことをするよくな心の暴力もDVなんだなと思った。」好きな人に必死になるのは分かるけど、相手の気持ちも考えるようにしないといけないと思った」などの感想が生徒たちから寄せられました。

男女平等推進センターでは都立東久留米総合高校との共催で、2年生(96人)を対象にデートDV講座を昨年12月13日(月)に開催しました。開催は今回で二回目です。講師は前回と同じく早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教・兵藤智佳氏と同学DVほっとプロジェクトの大学生6人(小口裕樹さん、南祐太郎さん、星野明子さん、吉清真理子さん、新井宏基さん、橋本有美さん)です。講座は、大学生たちによる交際の実際の男女の会話寸劇や、自らの恋愛体験談などデートDVについて理解を深める内容でした。大学生たちは、「テレビや雑誌などのメディアや友人の話などからつくられた恋人像に影響を受けて、相手に対して無理に自分の気持ちを押しつけていけないか考えてみよう。押しつけてはダメ、相手とコミュニケーションを取ろう」とメッセージを生徒たちに送りました。



### 「男女平等推進センター」をご利用ください。

**施設案内**  
交流ロビー  
参考図書・資料コーナー  
会議室 保育コーナー  
会議室の使用申請は、使用日の2カ月前の初日から前日まで。



**専門相談**  
**女性の悩みごと相談**  
毎週月曜日(祝日を除く)の午後1時30分から午後4時30分  
**女性弁護士による法律相談**  
毎月第1金曜日の午前9時30分から午後0時30分  
※いずれの相談も予約制(先着順)。詳しくはセンターへ。

**所在地・開館時間**  
東久留米市本町3-9-1-102  
TEL (042) 472-0061 FAX (042) 472-0053  
メール fifty2@higashikurume-city.jp

開館時間/月、水～日曜日 午前9時から午後9時30分  
(午後7時30分以降の会議室利用がない場合は、午後7時30分まで)  
閉館日/火曜日と年末年始(12月29日～1月3日)

### 『フィフティな川柳』入賞者表彰式

昨年11月27日(土)、「第39回東久留米市消費者展(屋内ひろば)」において、『フィフティな川柳』入賞者の表彰式が行われました。



入賞句はセンターロビーにて展示されました

初めに、馬場一彦東久留米市長から最優秀賞の大歳桂一さん(一般の部)、青山玄汰さん(学生の部)ほか、優秀賞の3人に賞状が手渡されました。

その後、『フィフティな川柳』選考委員長沢田改司氏から「表彰された句には家庭での男女共同参画をほのぼのと温かく表した作品が多く、入選句にも際立った作品が見られた」と講評がありました。



右から 馬場一彦市長、越後雅博氏、間野浩二氏、沢田改司選考委員長、青山玄汰さん、小峰奈緒さん、大歳桂一氏、篠宮正明市議会議員

\*『フィフティな川柳』は平成23年度も募集予定です。

### 編集後記

- 今号で、「高齢者の就労」の件で、シルバー人材センターで実際に就労している方々に話を聞くことができました。まず、驚いたことはシルバーパワーのすごさだ。若者よ！もっと元気を出せと言いたい。(S)
- 富士山、清らかな川の流れ、美しい夕焼け。市内の風景にたびたび心癒される。冬を越えて心ときめく春景色も楽しみだ。(T)
- 誰かがやることで変わる社会がある。湯浅さんの講演を聞き、一人ひとりが世の中を良くする活動家になれることを感じました。(N)
- 今号より編集委員に加えていただくことになりました。東久留米に薫風吹かせる一助ができれば…足を引っ張らないように頑張ります！(Y)
- 今年度より編集のお手伝いをさせていただくことになりました。地域の方々と交流を深めていきたいと思います。(K)
- 編集委員を新しい方と交替します。振り返ってみると、『ときめき』を通じてなんと多くを学んだことか。(I)

「ときめき」は、年2回発行。公募の市民による編集委員6人が企画編集しています。内容についてあなたのご意見・ご感想を市民部生活文化課、または男女平等推進センター宛にお寄せください。